

「らしさの線を飛び越えて」

川上村立かわかみ源流学園 8年 間宮 基文

「男のくせに、そんなことで泣くなや。」

小学校低学年の頃、僕が転んで膝を擦りむき、痛みに耐えかねて涙を流したとき、友達から言われた言葉です。また、僕のクラスには、釘などの工具を使うのが得意な女の子がいました。その子は「将来の夢は大工さん」と言っていました。ですがある日その子が少し落ち込んでいるように見えました。そこで、声をかけてみると親戚から

「もっと女の子らしい仕事にしたら？」

と言われたらしく悲しくなってしまったそうです。

僕たちは日常の中で、「男らしさ」、「女らしさ」という言葉を、何気なく使ったり耳にしたりします。しかし僕は最近、この「らしさ」という目に見えない線が僕たちの個性や可能性を小さくしてしまっているのではないかと思いました。

そう確信したのは、小学校低学年の頃のある授業をふと思い出したときです。そのときの授業は図工でのお絵かきの時間でした。テーマは特に無かったので僕はそのとき気に入っていた桃色を使って恐竜を描いていました。するとそれを見た友達が

「なんかお前の絵、ピンク多くて女子が描いた絵みたいやな。」

と言いました。特に僕は気にしてもいなかったし傷ついてもしませんでした。ですがその後絵を描くとき何故か僕は桃色を避けるようになっていました。むしろお気に入りの色ではなくなっていました。当時は考えもしなかったのですが、今考えてみると気づいてしまったんです。「らしさ」という言葉の力に。

社会に目を向けると、「ジェンダーレス」や「多様性の尊重」という言葉がたくさん言われています。制服を選択制にしたり、男性の育児休業が推奨されたりなど、古い考えを見直そうという動きはたしかに広まっています。しかし、僕たちの意識の根源には、「男はこうであるべき」「女はこうであるべき」という固定観念が根深く残っていると思います。

そしてこの「らしさ」は性別だけにとどまりません。「中学生らしい態度」「子供らしい素直さ」といった、大人たちが都合よく引いた線も存在します。その線からはみ出そうとすると、途端「変わっている」と目を向けられ、否定されたりします。そんな中で僕たちはいつの間にか周りの目を気にし、自分の本当の気持ちに蓋をして、誰かが作った「正しいらしさ」を演じるようになってしまったのではないのでしょうか。

しかし、本来「らしさ」とは、誰かに決められてよいものではないと思います。一人一人が違う顔を持ち、違う声を持っているように、好きな物や得意なこと、物事の捉え方が違うのは当たり前のことです。桃色が好きな男子がいてよいし、大工を目指す女子がいてもよい。運動が苦手な男子がいたって、それはその子の「らしさ」でありどこにも責められる理由などありません。

多様性を認める社会とは、なにも特別なことではないと思います。それは自分の物差しだけで他人の生き方や好みをはからないことだと思います。自分とは違う誰かの選択を「それはそれでいいな」と、そのまま受け入れる心の余裕を持つことではないのでしょうか。

自分の「らしさ」を貫くことは、少し勇気がいります。しかし、周りの見方が変わると、当たり前のように自分を出せる世の中になるのではないのでしょうか。

僕たちはこれから、さらに多様な人々がいる社会へと踏み出していきます。生まれた国、文化、性別、

年齢。様々な人と関わり合うために「らしさ」という言葉は時に人の個性を奪ってしまう可能性があることを理解すべきだと思います。

誰かが決めた枠に自分を当てはめる必要はありません。僕は僕、あなたはあなた。誰もが自分の「らしさ」を恥ずかしがらず当たり前のように出せる社会。そんな、お互いの個性を尊重し合える優しい未来を、まずこの学校、この教室という身近な場所から、築いていきたいです。